

## 国語 (その一)

### 第一問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

特に現実の社会問題が関わる場合、時間の問題は重要な要素です。たとえば地球温暖化の場合は、「予測の正しさが証明されたときには相当な犠牲者が出てしまう」という **イ** が存在します。そのため、研究が導く解答が確実だとは言いつれない状況でも、「どうするべきか」という意思決定に貢献することが期待されます。科学的に確定が困難な要素を含む問題だが、「今現在」社会的合意が必要となってしまうのです。

地球温暖化問題においては、問題が起きる前に **ロ** 「予防原則」の立場から、気候変動条約やCO<sub>2</sub>削減といった様々な政策的措置が動き出しました。結果として、反対する人は「科学的な結論が不確定なうちに政治が動き出した」との印象を抱き、研究の不備や政治的偏向を主張したりして論争が続くことになったのです。

このような状況を否定的に捉えて、政治論争が起きるような学問はまともでない、政治的中立性がないとの結論に飛んでいく人もいます。あるいはその逆で、科学的な検証を行って出した答えに反対する人がいるなんて信じられない、理性的ではないと叩く人もいます。

私自身は、<sup>(注)</sup>カントのように、論争の存在自体を肯定的に捉える立場です。それも、彼よりは一步踏み込んで、ある学問が人間社会に関わる切実な対象を扱うほどに、その学術的な論争と、政治的論争との間の境目が不明確になっていくのはやむを得ないし、だからこそ論争が必要だと思っています。それは、人間の認識能力の不完全さと、対象の複雑さが合わさったとき、何らかの政治性が生まれてしまうことは避けがたいと考えているからでもあります(なお私は、「政治的 (political) であること」と「党派的 (partisan) であること」を区別しています。前者は「市民生活においてどの価値を優先するか」ということ、後者は「誰の味方か」という人間関係的な側面のことです)。

環境科学の例が示すように、どんな学問分野をもってしても、完全に世界を認識し、記述できるシステムはありません。もしそんなシステムがあるとしたら、それはこの世界そのものに他ならないでしょう。それ以外のものは、どれだけ確かな方法を駆使したとしても、不完全なものでしかあり得ません。何らかの形で、必ず情報が欠落しているのです。どの情報を減らすかは各分野の選択であり、それは一種の価値観の反映でもあります。

そのため、複雑な系、たとえば経済活動のような人間社会の営みや、自然界であつても気象現象のような複雑な対象の予測はしばしば当たりません。すると、研究結果の導く結論をめぐる、**A** 対立する意見が不可避に生じることとなります。特にそれが、経済政策や環境政策のように、何らかの具体的なアクションを想定している場合は尚更です。<sup>(なおさし)</sup>

## 国語 (その二)

複雑な系を扱うがゆえの不確実性も政治を呼ぶのです。

そのことに加えて、『そもそも、ある社会的課題を扱う／扱わない、という選択自体が、既に一定の政治性を帯びています。研究に関与する研究者がどれだけ誠実に、理性的に、学問の基準に則して行動しようとも、あるテーマを選ぶというその行為自体は、社会における何らかの立場表明としての意味を持つのです。このことに、人文社会系、理工医系の差はほとんどありません。』

たとえば、「適切な多数決投票の方法を数学的に検証する」のようなテーマを研究したい経済学者がいるとしましょう。一見、特別な政治性は感じないかもしれませんが、独裁政権の支配する国であれば、「国民による多数決を行う政体を想定している」ために警戒されるかもしれません。

それは独裁政権がおかしいだけではないかという話ではなく、ここで言いたいのは、少なくともそのようなテーマが彼らにとつては全く「中立」に映らないだろうということです。もし私たちにとつてその主題が「中立的」に見えるとしたら、それは私たちが「民主主義は当然のこと」という価値観が普及した地域において、他の価値観をさほど想定せずに済んでいるからです。

理系が関わる例でも事情は変わりません。一九七〇年代〜八〇年代の日本では、環境問題を研究テーマに選ぶ理系学生は民間企業での就職が大変になるといわれていました。マジヨリティが環境問題に関心がなかった時代、敢えて環境に関心を持つことは「偏ったこと」とみなされかねなかったのです。現代ならこの感覚はむしろ逆でしょう。

「地球環境を気にかけること」も「民主主義を自明視すること」も、それぞれ一つの価値観であり、政治的信念の一種です。ただ、その価値観がマジヨリティにとって一般的になっている時代、地域ではそのことが目立たないだけです。

もちろん、「テーマの選択が政治性を持つ」ことは仕方ないにしても、それは『研究の過程に政治性が入り込むこととは違うのではないか、という指摘は可能です。』

たとえば、公害問題や、歴史上の虐殺事件といった問題に対し、ある組織や人物にとつて不利になる証拠を隠蔽した上で論文を書いたとしたら、それは「政治的」かつ「党派的」なデータの隠蔽ですし、研究不正に等しい行いです。

論争になりやすいのは逆のケース、すなわち証拠として用いる材料を広げる場合です。たとえば、教育を受けた役所の人間が残した文書記録や、定量的に計測可能な証拠といった従来も用いられていた判断材料だけではなく、知的障害をもつ人の数十年前の記憶や、コンピュータによるシミュレーションなど、確実さにおいて劣る要素を持ち込む場

## 国語 (その三)

合、前者は「実証的」だが後者は違うとして、拒否されることがあります。そして、そのような不確かなものを研究の材料に使うのは、政治的な意図があるからだと糾弾されたりするのです。

事例ごとに事情は違うので、一般化は困難なのですが、科学史を踏まえて私が思うのは、どちらかといえば、検証する対象を増やす方が、検証の厳密さを求めてそれを避けるよりは実りが多いのではないかと思います。【I】

二〇一八年現在、日本では過去の優生政策により障害者に対する強制的断種手術が行われたことが問題視されていますが、これも最初は当事者の証言を真剣に聞き、証拠となる資料を探した歴史家の努力がありました。また、地球温暖化問題が今世紀半ば、最初に話題になったときには、それがシミュレーションに基づく推論であることが問題視されましたが、現在はそうした手法が科学的推論の一つとして認知されています。【II】

以上のことを踏まえるならば、むしろ、「複雑な対象を前にして、価値中立を掲げることが持ちうる政治性」こそが念頭に置かれなければなりません。すなわち、マジョリテイの価値観に浸っているために自らの政治性が自覚できていない状態のことを、「中立」という名で呼び変えていないかどうかを、改めて問い直す必要があるでしょう。【III】

それに加えて、人間の理性の限界という問題もあります。実際、本人は真剣に研究をしている場合でも、無意識のバイアスで、ある証拠を完全に見逃し、自分の論点を支持する証拠ばかり集めるといったことがあります。【IV】

同時に言えるのは、「学問は現実の対象に近づくほど不可避の政治性を帯びる」ということを踏まえて、それでも学問的方法論に根ざして言葉を紡ぐことの大切さです。物理学のような法則定立的な方法にしる、歴史学のような個性記述的な方法にしる、定量的な社会学のようにその中間的なものにしる、それは世界を認識する異なったやり方として、数世代にわたり様々なテストを生き残り、受け継がれてきた人類の遺産なのです。【V】

私たちはバイアスのかかったやり方でしか世の中を見ることはできませんが、諸分野の方法というのは、地域や文化を超えて人々が選び取ってきた、いわば、体系性のあるバイアスです。体系的なやり方で、違う風景を見て、それを継ぎ合わせる。または違う主張を行いながらも、それを多声音楽のように不協和音も込みで重ねあわせていく。そのことにこそ、様々な分野が存在する本当の意義があるのではないのでしょうか。

(隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』による)

(注) カント —— ドイツの哲学者。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えています。

## 国語 (その四)

問一 空欄イに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① ジレンマ                      ② レトリック                      ③ パラドックス                      ④ リアリテイ
- ⑤ アクシデント

問二 空欄ロに入れるのに最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 門を叩く                      ② 頭を抱える                      ③ 釘を刺す<sup>く</sup>                      ④ 手を打つ
- ⑤ 虫が知らせる

問三 傍線部A「対立する意見が不可避に生じる」とあるが、それはなぜか。五十字以内(句読点なども字数に含む)で答えなさい。

問四 傍線部B「そもそも、ある社会的課題を扱う／扱わない、という選択自体が、既に一定の政治性を帯びています」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① いくら理性的であろうとしても、テーマの選択という行為は、マジョリティの価値観に従うものであるということ。
- ② 理工医系と違い人文社会系にとって、テーマの選択という行為は、対象の特質から中立的にはできないということ。
- ③ 研究テーマがいかに学問的であっても、テーマの選択という行為は、自らの立場を表明することになるということ。
- ④ 人間の認識は不完全なものであるので、テーマの選択という行為は、すべての対象を公平に扱えないということ。
- ⑤ 複雑な関連から切り離して対象を捉えようとしても、テーマの選択という行為は、単純化ができないということ。

## 国語 (その五)

**問五** 傍線部C「研究の過程に政治性が入り込む」とあるが、このようなことにならないために、どのような方法を取ればよいと筆者は考えているのか。十字で抜き出して答えなさい。

**問六** 次の一文を挿入する場所として、最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

一九世紀において、女性の知性が男性に劣るとの見解を出したいくつかの研究には、明らかにこのような傾向がみられました。

- ① 【I】    ② 【II】    ③ 【III】    ④ 【IV】    ⑤ 【V】

**問七** 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 人間の理性には限界があり、科学は社会問題に確実な解答を提示することができず、社会との間に不協和音が生じている。
- ② 学問は現実の対象に近づけば近づくほど政治性を帯びてしまうので、できるだけ政治的な問題に関わらない方が無難である。
- ③ 地球温暖化は、純粹に政治的な問題であるので、そもそも科学的な研究によって対策を講ずることができない問題ではない。
- ④ カントは学術的な論争と政治的論争の区別をつけようとしたが、両者の境界が不明確であることに、肯定的な価値がある。
- ⑤ 歴史的な淘汰を経て残っている学問の諸分野も、それぞれの偏向を持っているが、多様な分野が存在することに意義がある。

## 国語 (その六)

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

あらためて「倫理」とは何でしょうか。確かに安楽死や<sup>①</sup>ソウキ移植問題に関する「生命倫理」、日本原子力学会が設けている「日本原子力学会倫理委員会」など、時折耳にする言葉ではあります。しかし、いざその意味はと問われると、一言で言い表すのは容易ではありません。A時代とともに、また文化によっても、その意味は変わるでしょう。

本論では、その意味するところを、「<sup>B</sup>道徳」との違いを手がかりにして明確にしたいと思えます。倫理と道徳の違い？ 同じ意味じゃないの？ そう思われるのももつとです。実際、大辞林で「倫理」を引くと、「人として守るべき道。道徳」とあり、両者がほとんど同じ意味で使われていることが分かります。一般的にも、またアカデミックな議論の場でも、両者の区別は必ずしも<sup>②</sup>テツテイされているわけではありません。

しかし、哲学者や倫理学者のなかには、道徳と倫理のあいだに区別を設ける立場の専門家もいます。もちろん両者のあいだには重なる部分もあるのですが、明確に異なる側面もある。本書では、こうした両者を区別する専門家たちの議論を参考にしたいと思えます。なぜなら、現代の複雑化した世界において、その区別はますます重要になってきているように思えるからです。

両者の違いを説明するまえに、ひとつエピソードを紹介させていただきます。それは私にとって、その違いを痛いほど思い知らされた出来事でした。

当時小学校三年生だった息子をつれて、アメリカに出張に行ったときのことです。

<sup>(注)</sup> ハーレー・ダビッドソンで有名なアメリカ中西部のウィスコンシン州、その中南部に位置するマディソンという<sup>③</sup>コハンの街で学会が開かれることになっていました。

ホテルに到着し、買い物がてら街を散歩したときのこと。向こうから、四〇代くらいの太った女性がふらふらと揺れながらこちらに近づいてきます。乱れた身なりと手を差し伸べている様子から、物乞いをしようとしていることがすぐに分かりました。

私はとっさに息子の手をぐいと引いて、その女性を避けるように通りの反対側に渡ってしまいました。自分ひとりならまだしも、子供もいる状況で、何かよくないことに巻き込まれたら大変だ。その一心でした。

その直後でした。息子が、パニックを起こしたように大泣きをし始めたのは。なぜ、お母さんはあの人を助けなかったのか。なぜ、かわいそうな人にあんな仕打ちをするのか。ぼくがもし病気になったり障害を持ったりしたら、みんなに冷たくされるのか。あの人は、すごく悲しそうな声で、「ソーリー」と言っていたじゃないか。あの声がぼく

## 国語 (その七)

の心に残って離れない。とても悲しい。苦しい。そして、息子は何度もこう繰り返したのです。「この気持ちは一生残っちゃうと思う。お母さん、何とかして」。

私は懸命に説明を試みました。世の中には困っている人がたくさんいて、すべての人に<sup>④</sup>ホドコし物をすることはできない。その代わりに「税金」という制度があつて、その「みんなからちよつとずつ集めたお金」を使って、困っている人を助ける仕組みになっている。それに、あの人にお金をあげたとしても、お酒を買ってしまったらして、あの人のためにならないかもしれないよ。

<sup>D</sup>案の定、私の説明は息子にはひとつもとどきませんでした。結局、ホテルに帰っても一時間くらい大声で泣き続けることになりました。

「困っている人がいたら助けましょう」。これが小学生の頭の中にある行動規範です。なぜなら学校の授業でそう習ってきたし、そうすべきだと自分でも心がけてきたからです。世界は、困っている人が当然のように助けられる場所だと思っていた。

それなのに、その絶対的なルールを、一番身近な大人である母親が目の前でやぶつたのです。パニックになるのも無理はありません。

もちろん、私も「困っている人は助けるべきだ」ということは理解していたつもりです。けれども、あの状況でそれに従うことはできなかったし、従うのが最善ではないかもしれないということ、つまりこの規範がそれほど絶対的ではないということも、いつの間にか知っていました。「困っている人は助けるべきだ」は「タテマエ」であつて、「ホンネ」は別にある。そんなふうに考えていました。

要するに、私と息子は、道徳と倫理のあいだで引き裂かれていたのです。小学校の道徳の授業で習うような、「〇〇しなさい」という絶対的で普遍的な規則。これに対し倫理は、現実の具体的な状況で人がどう振る舞うかに関わります。相手が何者か分からず、自分の身を守る必要もあり、時間やお金の余裕が無限にあるわけではない今・この状況で、どう振る舞うことがよいのか。あるいは少しでもマシなのか。倫理が関わるのはこういった領域です。

哲学者のアラン・バディウは、その名も『倫理』という本のなかでこう述べています。「倫理を抽象的範疇(人間、権利、他者……)に結びつけるのではなく、むしろ、さまざまな状況へ差し戻すことにしよう」。そしてバディウは言います。倫理に「一般」などというものはない、と。なぜなら状況が個別的であるのに加えて、判断をする人も、それぞれに異なる社会的、身体的、文化的、宗教的条件のなかに生きており、その個別の視点からしか、自分の行動を決められないからです。「倫理『一般』などないとすれば、

## 国語 (その八)

それは倫理『一般』で自己を武装せねばならない抽象的な主体などないからだ。

哲学や倫理学のような学問の領域に限らず、社会生活のさまざまな場面で、私たちはものごとを一般化して、抽象化して捉えてしまいがちです。「人間」「身体」「他者」という言葉。ほんとうは、そんなものは存在しません。それぞれの人間は違うし、それぞれの身体は違うし、それぞれの他者は違っています。

けれどもつついその差異を無視して「人間一般」「身体一般」「他者一般」について語り、何かの問題を扱ったような気になってしまう。もちろん、道徳が提示する普遍的な視点を持つことも重要です。そうでなければ、人は過剰に状況依存的になってしまい、その場まかせの行動をすることになってしまいうでしょう。けれども、「一般」として指し示されているものは、あくまで **イ** であることを、忘れてはなりません。なぜなら「一般」が通用しなくなるような事態が確実に存在するからです。そして、<sup>E</sup>倫理的に考えるとは、まさにこのズレを強烈に意識することから始まるのです。

(伊藤亜紗『手の倫理』による)

(注) ハーレーダビッドソン —— オートバイメーカー。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えています。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「時代とともに、また文化によっても、その意味は変わるでしょう」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 意味とはポジティブなものであるということ。
- ② 意味とは非合理なものであるということ。
- ③ 意味とは変幻自在なものであるということ。
- ④ 意味とは相対的なものであるということ。
- ⑤ 意味とは進化するものであるということ。

問三 傍線部B「道徳」とあるが、これはどのようなものか。本文中から十字で抜き出して答えなさい。



## 国語 (その九)

**問四** 傍線部C「息子がパニックを起こしたように大泣きを始めた」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① お母さんが一生懸命に説明してくれている社会のシステムを、理解することができなくて、憤りがおさまらなかったから。
- ② お母さんがかわいそうな人を助けなかったことがトラウマとなって、自分の中にずっと残ってしまいうことが恐怖であったから。
- ③ 日本では「困っている人は助けましょう」と教えられたが、アメリカではそれが絶対的なルールではないことが分かったから。
- ④ 目の前にいる困っている人と、自分の子供を天秤びんにかけ、自分を守ることに一心になっているお母さんを見てしまったから。
- ⑤ 何にもまして守るべきだと思い、自己を律してきた規範を、自分にとって最も関わりの深いお母さんが目の前で破ったから。

**問五** 傍線部D「案の定」とあるが、これと同じ意味をもつものとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① ひとえに
- ② すべからず
- ③ はたして
- ④ ひつきよう
- ⑤ もとより

**問六** 空欄イに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 洗練された「物語」
- ② 実在しない「仮説」
- ③ 取るに足りない「理論」
- ④ 体裁のよい「現実」
- ⑤ 遵守できない「道徳」

## 国語 (その十)

問七 傍線部E「倫理的に考える」とあるが、「倫理」とは、何について考えるものなのか。本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 現実のさまざまな問題に対処するためには、「ホンネ」も大事ではあるが、「タマエ」にしたがわないと混乱が生じてしまう。
- ② 複雑化した現代社会の問題を解決するに際して、哲学者や倫理学者の行う議論は、机上の空論で役には立たないものである。
- ③ 道徳に従うことも重要ではあるが、その観点からすべてを割り切ると無理が出てくることも認識しておかなくてはならない。
- ④ 言葉は個別具体的なものを抽象化して概念的に捉えるものなので、倫理を言葉でもって表現し、説明することには限界がある。
- ⑤ より倫理的な立ち振る舞いをするためには、自分の視点に立脚するのではなく、他者の視点に立脚して行わなければならない。

## 国語 (その十一)

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

夏目漱石は明治二十七年(一八九四年)暮れから翌年正月の十数日間、円覚寺で参禅した。大学を出て英語教師になっていた。このとき漱石に対したのが若き日の宗演である。この参禅体験は十六年後に書いた『門』に描かれている。

漱石は若いときから捉えようのない不安に悩まされていた。この不安を晴らすための参禅だったようだ。しかし言葉の人である漱石にとって、言葉の対極にある禅は手は触れない世界だったにちがいない。不安はついに解消しなかったようだ。それどころか増殖しつづけた。いわば漱石の根源的不安であり、心の癌<sup>がん</sup>だった。この不安こそがのちに漱石を偉大な作家に育て上げることになる。

漱石は正岡子規<sup>しき</sup>と同じ慶応三年(一八六七年)生まれだから、明治の年数が満年齢と一致する。漱石は東京、子規は四国松山の生まれだが、一高(第一高等中学校)で出会った生涯の友となった。しかし子規が明治の国家主義の優等生として生きたのに対して、<sup>A</sup>漱石は国家主義からの自覚的な脱落者となった。

その理由としてまず思い当たるのは漱石の生い立ちである。子規は幼くして父を亡くしたが、母八重とその実家の大原家の人々に大事に育てられた。兄思いの妹律もいて、晩年寝たきりになっても八重と律が自己犠牲的な介護をした。

病気のため結婚はしなかったが、母と妹という身近な二人の女性に愛されているという自覚が、どれほど子規に自信を与えたか。この二人の愛情が子規を大地に根づかせた。いわば日本古来の母権社会に子規は生きていた。これが子規を無上の<sup>B</sup>楽<sup>らく</sup>天家にし、「明治の子」としてまっすぐに歩ませることになる。

一方の漱石は子規とは反対に母のぬくもりを知らず育った。六人兄弟の末っ子に生まれ、母親の乳が出なかつたので生後すぐ里子に出される。ところが里親が漱石を<sup>ざる</sup>筈に入れた夜店にさらしているのを、実家が見るに見かねて引き取った。その後、また養子に出され、漱石が実家に戻ったのは九つときだった。

漱石の小説の美しいヒロインたちがときに冷ややかで意地悪な印象を漂わせるのは、そのせいではないか。母親は人生で最初に出会う女性である。子ども時代に母親と縁が<sup>①</sup>ウス<sup>うす</sup>かつたことが、漱石に女性への<sup>②</sup>カイギ<sup>かいぎ</sup>を植えたのではないか。漱石に生涯つきまとう不安の根源はここにありそうだ。

## 国語 (その十二)

しかし漱石を明治の脱落者にした決定的な要因はロンドン留学だった。漱石は明治三十三年(一九〇〇年)から二年間、ロンドンに留学する。明治政府は文明開化策の一環として欧米の優れた学者を日本に招き入れる一方、日本の有望な青年を留学させて西洋文化を学ばせた。

今と違って明治の留学は国家事業だった。漱石の留学も英語研究を目的とし、年間千八百円の留学費と三百円の留守宅手当が文部省から支給された。その年の秋、プロイセン号で横浜港を出航したとき、漱石は明治の国家的使命と期待を負っていた。

X

漱石はロンドン留学をのちにこう振り返っている。

ロンドン  
倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不<sup>③</sup>ユカイの二年なり。余は英国紳士の間にあつて  
○<sup>おおかみ</sup>狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。

『文学論』

狼群に伍する一匹のむく犬。自分は明治の新国家が求める「有為の人」にはなれない。ロンドン留学の挫折は明治の国家主義からの脱落を意味していた。

明治三十六年(一九〇三年)一月、帰国した漱石は鬱々と過<sup>④</sup>ごす。親友の子規は前年秋、世を去っていた。カガヤかしい明治の青春は子規とともに過ぎ去り、時代は日露戦争(明治三十七年—八年、一九〇四年—〇五年)へと動いていた。

日露戦争の最中、高浜虚子は漱石の気を晴らそうと朗読会(山会)の文章を書くよう勧めた。そうして生まれたのが最初の小説『吾輩は猫である』である。

『猫』は世の中を皮肉に眺める苦沙弥先生と仲間たちの物語である。明治の国家主義からの脱落が漱石を小説家にし、世間に距離を置いて斜に構える苦沙弥先生の位置に立たせた。

漱石は小説家として一步を踏み出したときから、明治という時代を引き受けていたのである。時代を引き受けるとは同時代の日本人の運命を自分の問題としたということである。だからこそ偉大な作家なのだ。その後、漱石は時代を炙<sup>あぶ</sup>り出す、この皮肉家の苦沙弥先生をさまざまに変奏させて名作を書きつづける。

明治四十年(一九〇七年)、漱石は東京帝国大学の講師を辞めて朝日新聞社に入る。

## 国語 (その十三)

官職を投げ出して一新聞社の社員となるなど、これも当時としては非常識な反国家的な選択だった。しかし明治の脱落者の烙印らくくが何より鮮やかに見てとれるのは『三四郎』(明治四十一年、一九〇八年)の一節だろう。

物語は日露戦争直後、熊本の五高(第五高等学校)を卒業した小川三四郎が東京へ向かう列車の中からはじまる。乗り合わせた四十くらいの髭ひげの男が、日本はいくら日露戦争に勝って一等国になっても駄目だ、イ、という話をするものだから三四郎は、

「然しかし是これからは日本も段々発展するでせう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、「亡ほろびるね」と云いった。

日露戦争の勝利に浮かれる日本人の頭に□を浴びせる髭の男は漱石その人だろう。「亡ほろびるね」。この一言は日本がこれからたどる過酷な歴史、第二次世界大戦、広島と長崎への原爆投下、焼け跡で迎える敗戦、そして現代の末期的大衆社会の滑稽な惨状まで見透すような不気味な予言である。

董すみれ程うまな小さき人に生れたし 漱石

明治三十九年(一九〇六年)、日露戦争の翌年の作。漱石の心の奥に鬱々と眠る夢を取り出したような句である。小さな董の花とは明治の国家主義から外れた漱石のささやかな理想だった。

(長谷川権「悩める漱石」『図書』第八五三号 二〇二〇年一月)による)

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えています。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「漱石は国家主義からの自覚的な脱落者となった」とあるが、それはなぜか。最も大きな原因を本文中から九字で抜き出して答えなさい。

## 国語 (その十四)

問三 傍線部B「楽天家」とあるが、この言葉の対義語として最も適切なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① リアリスト
- ② ニヒリスト
- ③ ペシミスト
- ④ ロマンチスト
- ⑤ エゴイスト

問四

X

に入る、次のア～エの五つの文を正しく並べたものとして、最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア そのあげく神経衰弱になって文部省から帰国を命じられる。

イ 山積みの文学書を読んで詳細なノートをとる。

ウ ところがロンドンに住みはじめた漱石はたちまち壁に直面する。

エ それに気づいた漱石は大学に行かず、下宿にこもって、「文学とは何か」という大問題に取り組む。

オ 古来、日本の知識階級が親しんできた漢詩文と違って西洋文学はとも国家の役には立ちそうにない。

- ① ウ↓ア↓エ↓イ↓オ
- ② ウ↓エ↓イ↓ア↓オ
- ③ ウ↓オ↓エ↓イ↓ア
- ④ オ↓イ↓ア↓ウ↓エ
- ⑤ オ↓エ↓イ↓ア↓ウ

問五 傍線部C「狼群に伍する一匹のむく犬」とあるが、このようになった漱石は、日

本に帰ってきてどのような作家になったのか。次の空欄に入れるのに最も適当なものを、本文中から十四字で抜き出して答えなさい。

作家になった。

## 国語 (その十五)

問六 空欄イに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 富士山は人間がつくったものではない
- ② 富士山が日本にあることを思い出すといけない
- ③ 富士山を世界にアピールしなければならぬ
- ④ 富士山だけではないことを思い知らせた
- ⑤ 富士山よりほかに自慢するものは何もない

問七 空欄口に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 冷や水
- ② パンチ
- ③ 質問
- ④ 脚光
- ⑤ 罵声

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 漱石はロンドン留学から帰り、国家的使命を果たせなかった重圧から逃げるため、はじめて円覚寺で参禅した。
- ② 若いときから根源的の不安を抱えていた漱石だったが、抱えていたゆえに作家として大成することができた。
- ③ 国家に対し皮肉な態度を取った作品を発表した漱石は、反国家的な作家であると批判されることになった。
- ④ 女性に対して意地悪な印象をもっていた漱石は、作品の中でも女性を好ましいものとして描かなかつた。
- ⑤ 正岡子規が死んだあと、友人がいないことで鬱々としていた漱石に、高浜虚子が救いの手を差し伸べた。